
研究の経緯と成果・課題

藤尾慎一郎

I 研究の目的

歴博が約 20 前から推進している AMS—炭素 14 年代測定法によって得られた実年代は、弥生時代の通説・定説に大幅な見直しを求めている。従来よりも 500 年早く、水田稲作が始まっていたことによって、弥生前期・中期を中心に存続期間が延びた結果、弥生時代はこれまでの約 2 倍となる約 1200 年間つづいたことがわかった。水田稲作の本州島各地への拡散はきわめてゆっくりとしたものとなり、当初から存在し、弥生社会の急激な発展の原動力と考えられてきた鉄器は、水田稲作が始まってから 600 年ぐらいたたないと出現せず、その結果、弥生時代の前半は石器時代であったこともわかった。しかし弥生時代の存続期間は延びても、見つかっている住居や墳墓の数は変わらないため、同時期における住居や墳墓の数は減少するか、ある時期に偏ることになるため、大規模な人口を要した巨大な農耕集落が短期間に発達するという、これまでの見方にも当然、影響は及ぶ。このように本研究は、イネと鉄を象徴として、急激な発展を遂げると考えられてきた弥生時代像から、水田と石器を象徴として、ゆっくりと進んだ弥生時代像への見直しを目的とする。なお本基幹研究の成果は、2018（平成 31 年春）年度開設予定の総合展示第 1 室新構築の学問的裏づけとなるものである。

II 共同研究員の分担

共同研究員とテーマとの関係は当初、以下の通りであった。

- 1 従来の弥生時代の年代観に基づいていた韓国青銅器時代の年代的見直しと、波及する諸問題（李亨源）
- 2 水田稲作開始後、600 年たたないと出現しない鉄器。石器時代が 600 年続いたあと、初期鉄器時代に入る。鉄の普及を前提とした弥生社会発展図式の見直し（野島永）
- 3 食料の獲得と生産。水田中心史観と畑作との混合史観の再検討（安藤広道）
- 4 弥生時代の存続幅が倍になっても遺跡の数や遺構の数は変わらないので、一時期あたりの人口が減ることになる。人口が減った弥生社会像の再構築（松木武彦）
- 5 前 8 世紀までさかのぼった弥生青銅器の起源と、列島内における儀礼・権力（小林青樹・吉田広）
- 6 本州・四国・九州など、日本列島の「中の地域」における条痕文土器文化と、遠賀川系土器文化の 700 年間にわたる異文化併存の意味と、世界史的な位置づけ（設楽博己・小林謙一）

-
- 7 弥生文化の周辺。前4～前2世紀のわずか300年しか水田稲作をおこなわなかった、東北北部の文化的位置づけ（高瀬克範）
 - 8 楽浪郡の設置に伴う中原文化との接触が倭人社会にもたらしたもの（上野祥史）
 - 9 定型化した前方後円墳の成立年代（岸本直文）
 - 10 土壌中の微粒炭素を用いた縄文・弥生時代の植生史（小椋純一）
また2年目からは新たに2名の共同研究員を加えた。
 - 11 韓半島南部の初期鉄器文化と弥生文化の鉄器文化との関係（李昌熙）
 - 12 縄文墓制と弥生墓制の本質的な違い（山田康弘）
- 以下、年度ごとの研究経過と研究成果について述べる。

III 研究の経過

第1年目（平成21年度）

研究会

21年度は5回の研究会を開催した。4回を歴博で、1回を京都で国際研究集会として行った。

第1回 5月16日（土）・17日（日）：本館

藤尾慎一郎 「新年代による弥生時代像の再構築」

小林謙一 「奈良県における弥生後期—古墳移行期の炭素14年代測定—」

第2回 7月25日（土）・26日（日）：本館

高瀬克範 「石製収穫具の使用痕分析—日本列島弥生時代と朝鮮半島青銅器時代の比較—」

小椋純一 「弥生時代における日本の植生景観再考—草原はどの程度存在したのか—」

野島永 「弥生時代初期鉄器の実像とその普及過程」

第3回 10月24日（土）・25日（日）：同志社大学今出川キャンパス寒梅館（京都）

2009年度国際研究集会「日韓先史時代の集落研究」との合同研究会

記念講演 李 亨源（韓神大学校博物館）「集落構造からみた韓国中西部地域の青銅器社会」

李 秀鴻（蔚山文化財研究院）「蔚山地域の青銅器時代集落について」

裴 眞晟（国立中央博物館）「無文土器時代前期の墓制」

趣旨説明 藤尾慎一郎・濱田竜彦 集落論の基礎的な方法論について

設楽博己・小澤佳憲 集落の形成要因と統合原理（祭祀・経済）集落構造—平面構成と集団間序列を含む— コメント 豆谷和之

石黒立人・柴田昌児 集落景観の視覚化 コメント 桑原久男

小澤佳憲・若林邦彦 単位集団論

津村宏臣 報告書抄録データをもとにした視覚化

総合討論 総合司会 石黒立人・若林邦彦 コメンテーター 田崎博之・安藤広道

第4回 12月26日（土）・27日（日）：本館

ゲストスピーカー

今村峯雄 「ベイズ統計による型式間境界の算出と土器型式を用いたウィグルマッチ法について」

「縄文はいつから!？」展見学 小林謙一展示代表者解説

石川岳彦 「遼寧地域における鉄器の普及時期について」日本・中国考古学会会員

小林青樹：石川報告に対するコメント「燕と遼寧地域の初期鉄器問題再考による朝鮮・日本への影響」

第5回 3月20日(土)・21日(日)：本館 C班との合同研究会

統一テーマ 文化のひろがりと境界

広瀬和雄 「古墳時代の「国境」を考える」

仁藤敦史 「7世紀後半における境界認識と支配—評・大宰総領・京の領域性—」

藤尾慎一郎 「弥生文化の境界—多文化列島の前1千年紀—」

高瀬克範 「青森県域における生業と地域構成—「弥生文化」の広がりを考えるために—」

1年目の研究成果

炭素14年代測定にもとづく新しい年代観のもとで、もっとも大きな論点となるのは、水田稲作の開始年代と鉄器が出現する年代である。水田稲作の開始年代に関する主な意見には、歴博が主張する前10世紀説と、遼寧式銅剣遼西起源説に立つ前8世紀説がある。議論の結果、従来の前5世紀という年代観よりはさかのぼることについて、共同研究員間で共通の認識を持つことができた。

これまで弥生早・前期後半以前に比定されてきた40点弱の鉄器が、出土状況から、時期を特定できないものがほとんどであることを野島永が追認したことで、鉄器の出現年代は、前期末まで下ることが共通認識となった。鉄器研究者のほとんどが公式に態度を明らかにしていないなかで、鉄器研究者の1人である野島が態度を鮮明にしたことの意味は大きい。

野島は日本列島における鉄器の初現を前期末とみるが、その年代は歴博の前4世紀説と、それ以外の前300年説がある。今回、石川岳彦は前300年説の根拠となっていた文献の曖昧さと、遼寧地域では前5世紀ぐらいから鉄器が普及していたことを明らかにしたうえで、歴博の前4世紀説を古すぎるとする批判は当たらないことを明らかにした。

なお、石川の研究成果は、歴博研究報告通常号に発表されている。石川・小林青樹「春秋戦国期の燕国における初期鉄器と東方への拡散」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集, 1-40頁, 2012.1)。

また第3回研究会, 2009年度国際研究集会の要旨集と, 成果報告は以下のとおりである。

藤尾慎一郎・李昌熙編 2009.10 『日韓先史時代の集落研究』平成21年度国立歴史民俗博物館研究集会発表要旨集, 京都同志社大学。

藤尾慎一郎・李昌熙 2010.12 「歴博国際研究集会「日韓先史時代の集落研究」開催報告」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第160集, 73-188頁)。

第2年目(平成22年度)

研究会

4回の研究会を開催した。歴博で3回, 韓国で1回である。なお5回目も予定していたが, 3月11日の東日本大震災のため, 次年度に延期した。

第5回 5月16日(土)・17日(日):本館

小林青樹 「弥生祭祀の起源と系譜」

吉田 広 「弥生青銅器祭祀の展開」

ゲストスピーカー

石川日出志 「東日本の青銅器祭祀と石製装身具について」

第6回 7月24日(土)・25日(日):本館

松木武彦 「古墳時代開始論と鉄」

上野祥史 「日本列島出土鏡の生産と流通」

岸本直文 「古墳時代の暦年代」

第7回 10月25日(月)～28日(木):大韓民国江原道春川所在青銅器～原三国時代の集落・
墳墓遺跡の調査」

第8回 12月25日(土)・26日(日):本館

山田康弘 「縄文時代の墓域構造と埋葬小群—弥生墓制研究を射程—」

李 昌熙 「韓半島における鉄器の出現,そして日本列島では」

第9回 3月20日(日)・21日(月):本館

※3月11日に発生した東日本大震災のために平成23年5月に延期

ゲストスピーカー

中沢道彦 「縄文農耕論をめぐって—栽培種植物種子の検証を中心に—」

藤尾慎一郎 「新しい弥生時代像」報告書作成に向けて

現地検討会

韓国現地研究会の日程と見学場所は以下の通りである。

10月25日

金浦市雲陽洞遺跡第11次調査 青銅器時代集落,原三国時代墳墓 高麗文化財研究院

広州市駅洞遺跡 青銅器時代の集落・墳墓(遼寧式銅剣出土)

10月26日

江原大学校博物館見学

翰林大学校博物館見学

華山郡・居礼里遺跡第1地区(漢江文化財研究院),第5地区の青銅器時代集落(江原考古文化財研究院)

江原文化財研究院鳳儀洞事務所 突帯文土器調査—型式学的な差と炭素14年代の測定値に有意性が認められそうなのことがわかった。まだ測定数が少ないので,増やした上で検証し直す必要がある。

10月27日

国立春川博物館見学

中島遺跡群 青銅器時代集落,鉄器時代の畑

泉田里支石墓群 整備された遺跡見学

芳洞里古墳 高句麗の5世紀の古墳(片袖式石室)

10月28日 京畿道博物館見学

弥生時代が始まる前10世紀に先行する、前13～前11世紀の青銅器時代早期・前期の集落遺跡を中心とした踏査と、大学・国立・道立博物館を見学した。

90年代には慶尚南道地域でしか、わかっていなかった当該期の集落遺跡の調査が、京畿道、江原道でも盛んに行われるようになり、特に早期や前期といった青銅器時代開始期の様相が明らかになってきた。日本列島でいう縄文後期後半～晩期に併行する時期である。

日本列島でもこの頃から、雑・穀物が存在していた可能性を示す証拠が増加し始めるが、韓半島の北部で水田稲作以前の農業が本格化して、農耕社会が成立し始めることからすると、西日本の縄文社会にも何らかの影響をあたえていたことが想像される。

2年目の研究成果

研究会では、弥生祭祀と古墳成立論、弥生墓制、韓国における鉄器の出現に関する研究発表を、現地研究会は、青銅器時代と原三国時代の集落や墳墓を日頃、眼に触れる機会が少ない地域である韓国北部の京畿道、江原道で行った。

弥生祭祀：小林青樹、吉田広、石川日出志（ゲストスピーカー）の発表から、弥生祭祀は大きく3つの段階と、2つの地域性で語られることが明らかになってきた。灌漑式水田稲作の開始と同時に始まる赤塗壺（丹塗磨研土器）を対象にした水口祭祀や種粃祭祀を皮切りに、前4世紀前葉以降、青銅器祭祀へと移っていくが、それには大陸系の論理が支配する武器形祭器と、縄文系の要素も加わった銅鐸祭祀の2つがある。このような福井から静岡西部を結ぶ線より西の地域に広がる青銅器祭祀のほかに、中部・関東地方には、前2世紀以降、それまでの再葬墓文化が、赤塗壺の祭祀をへて、最終的に小銅鐸、巴型銅器、有鉤銅釧などの青銅器へと移っていくものがある。これらは西の青銅器祭祀と同じレベルで捉えられるものなのか、そうではないのかが、まだはっきりしないので、中部以東の水田稲作に伴う祭祀・儀礼の実態はまだよくわかっていないといえよう。いずれにしても東西の青銅器は、武器の金属光沢と銅鐸の精緻さと造形をあわせもつ青銅鏡へと転換し、古墳時代の祭器となっていく。

古墳成立論：岸本直文、上野祥史は、古墳開始年代を考古学的に3世紀中ごろにみているが、自然科学的にも進展があった。坂本稔が3世紀後半代に比定される古墳の木棺を対象に、炭素14年代測定を行い、年輪年代測定と照合した。あいにく棺材がコウヤマキという、年輪年代法が難しい樹種であったため、年輪年代が出なかったが、炭素14年代測定との関係は極めて高い相関性を示した。舶載の紀年銘鏡の年代と、古墳成立年代との時間差が縮まりつつある現状では、かつての伝世鏡論に大きな意味が見いだせなくなったのも事実であり、弥生開始年代の遡上に伴う傾斜編年の見直しとも連動した動きとなっている。さらに松木武彦は、古墳成立論の中で大きな位置を占めた鉄器の役割を、集落や墓制の変化、鍛冶遺構などを含めて総合的な再構成の中で位置づけ直す必要性を強調している。

墓制：弥生開始年代が大幅にさかのぼったことによって、土器型式の存続幅が前期と中期を中心に100年、150年と長くなってくると、弥生墓制研究も方法論の大きな転換が必要となってくる。

弥生集落論の見直しでもクローズアップされた、いわゆる累積効果をどう考えるのかである。ただ縄文墓制論との違いは、九州北部の弥生墳墓には前漢鏡や武器形青銅器を持つものが含まれることである。これら年代を推定できる考古資料をもとに、縄文墓制論とは異なる墓制論を構築できるかどうかにかかっているといえよう。

鉄器の出現：李昌熙が環朝鮮海峡地域の炭素14年代測定を精力的に進めたことによって、韓国南部では前400年頃に鉄器が出現していることが明らかになってきた。日本列島では今のところ前4世紀前葉（前期末）がもっとも古い鉄器の出現年代である。しかし中国遼寧地方の戦国後期～末期の研究が進み、前5世紀代には遼寧地域で鉄器が普及していたことが明らかになってくると、日本列島の鉄器の出現年代もさらにさかのぼる可能性のあることが小林青樹によって明らかにされてきた。一度は保留した弥生前期後半の鉄器も、再評価が必要な段階に至りつつあることは間違いのないであろう。

第3年目（平成23年度）

最終年度の3年目にあたる2011年度は、報告書提出用論文の構想発表を2回に分けて行うことと、日本列島最北端の水田稲作が、弥生文化の枠内で捉えられるかどうか、実際に現地を訪れ、水田立地と出土遺物から検討することにあつた。また、九州北部と鳥取の弥生開始期の遺跡から出土した、土器に付着した炭化物の炭素14年代測定を行い、両地域における弥生開始年代の確認作業を行った。その結果、鳥取平野では瀬戸内側と同じ、前7世紀前葉には水田稲作を始めていたことがわかった。

研究会

4回の研究会を開催した。歴博で3回、青森で1回である。

第9回 5月21日（土）・22日（日）：本館

安藤広道 「水田中心史観批判の功罪」

ゲストスピーカー

中沢道彦 「土器の種子圧痕からみた縄文農耕の検証」

第10回 7月22日（金）～24日（日）：青森県津軽地域所在、水田遺跡の調査

第11回 12月25日（日）・26日（月）：本館、神谷町機構本部会議室

小林謙一 「縄文時代晩期～弥生時代前期における海洋資源依存の度合い」

山田康弘 「山陰地方弥生時代前期墳墓にみられる縄文時代的様相」

小林青樹 「前1千年紀のユーラシアにおける青銅器文化」

吉田 広 「弥生青銅器祭祀の展開と特質」

藤尾慎一郎 「弥生鉄史観の見直し」

李 昌熙 「韓半島初期鉄器時代の年代と特質」

松木武彦 「人口と集落パターンからみた弥生・古墳移行期の社会変化」

坂本 稔 「日本版較正曲線最新版と弥生年代論の現状」

第12回 3月19日（月）・20日（火）：本館

李 亨源 「突帯文土器と集落の観点からみた韓半島の青銅器文化と初期弥生文化」

-
- 小椋 純一 「弥生時代に草原はどの程度存在したのか」
野島 永 「弥生時代の鉄器文化とクラフト・スペシャリゼーション」
広瀬 和雄 「東国の初期古墳についての2, 3の問題」
高瀬 克範 「弥生と続縄文」

現地検討会

本年度は2回目の研究会を青森県弘前市で実施した。

第10回研究会 7月22日(金)～24日(日) 青森県弘前市所在の弥生時代併行期の水田稲作遺跡の調査」弘前市砂沢遺跡(現在もっとも北で見ついている先史時代の水田跡)。田舎館村垂柳遺跡。

現地検討会では、世界でもっと北にある先史時代の水田遺跡である砂沢遺跡とその出土遺物。青森最大の水田遺跡である垂柳遺跡とその出土遺物などを見学、調査した。

その結果、砂沢遺跡が縄文集落遺跡と共通する立地、すなわち、複数の生態系が交錯する地点に立地するのに対し、垂柳遺跡は平野の中央という、弥生時代の大集落遺跡と共通する立地にあることを確認した。

これは、砂沢遺跡がパイロットファーム的な性格を持つことと、垂柳遺跡が本格的な水田稲作を行う農耕集落であることを意味する。縄文人が縄文生業の一環として水田稲作を始め、それがやがて本格的な水田稲作へと展開していくプロセスのなかに、2つの遺跡を位置づけられるのかどうか

が焦点となる。
なおこの調査に関しては、「最北端の水田稲作」(『本郷』No.96, 23-25頁, 2011.11)に小文を寄稿している。



写真1 砂沢遺跡遠景

(水面下が水田跡：この背後には縄文時代から連綿と築かれた縄文人の村が広がっている)

年代学的調査

重点配分の申請を行い、福岡県小郡市大保横枕^{おおほよこまくら}遺跡、鳥取市本高弓ノ木^{もとだかゆみのき}遺跡出土弥生前期土器に付着した炭化物の年代測定を行った。

福岡県小郡市大保横枕遺跡は、宝満川の河岸段丘上に造られた弥生時代前期の二重環壕、貯蔵穴、住居からなる遺跡で、板付Ⅰ新式～Ⅱa式古段階から営みが始まり、板付Ⅱc式段階には環壕が埋没する。小郡市地域では低地部に見つかった初めての環壕で、環壕内には住居は認められないという、貯蔵穴型の環壕という点で三国丘陵上の遺跡と同じ傾向を見せる。本遺跡から出土した板付系土器と突帯文系土器に付着した炭化物9点をAMS—炭素14年代測定したところ、前7世紀に村が造られ、前5世紀には環壕が埋没したことが明らかになった。

鳥取市本高弓ノ木遺跡は、鳥取平野で3番目に古い水田稲作開始期の遺跡と考えられている。遠賀川系の甕よりも前期突帯文系甕の比率がきわめて高い器種組成をもつ。型式学的には3段階に分かれると予想され、もっとも古い突帯文系土器には少条沈線をもつ遠賀川系と、瀬戸内の突帯文土器最終末に比定される沢田系の浅鉢が伴う。これまでなら間違いなく、遠賀川系土器と突帯文系土器は、時期差として分離されてしまうところだが、18点を炭素14年代測定した結果、いずれも前7世紀前葉に同時併存することを確認した。本遺跡が前7世紀には出現していたことがわかったことで、山陰東部には神戸よりも早く水田稲作が始まっていたことを知ることができた。大保横枕遺跡はすでに報告書が刊行されているが、本高弓ノ木遺跡は平成24年度刊行予定なので、報告書内へレポートを寄稿するべく準備を進めている。またいずれも本書に、研究ノートを調査責任者と連名で掲載している。

研究成果

現地検討会と、年代学的調査の成果はすでに記した通りである。また3年目の共同研究会では、報告書の投稿予定論文が成果となるので、Vの「全期間の研究成果」であわせてふれることにする。

IV 成果報告書

当初予定した成果報告書の章立て、およびタイトルは以下のとおりである。

『農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—』歴博研究報告特集号。

研究成果報告書目次

序章 研究の経緯と成果・課題

I 弥生文化の環境と年代

- ① 小椋純一 弥生時代の植生における草地の割合について
- ② 藤尾慎一郎 弥生長期編年の現状と課題（研究ノート）

II 弥生文化をとりまく文化

- ③ 高瀬克範 弥生と続縄文
- ④ 李 亨源 突帯文土器と集落からみた韓半島青銅器文化と初期弥生文化
- ⑤ 李 昌熙 韓半島初期鉄器の年代と特質

III 弥生文化の集落と墳墓

-
- ⑥ 山田康弘 弥生時代前期列状配置墓域における埋葬原理
 - ⑦ 松木武彦 人口と集落動態からみた弥生・古墳移行期の社会変化
- IV 弥生文化の鉄器文化
- ⑧ 藤尾慎一郎 弥生鉄史観の見直し
 - ⑨ 野島 永 弥生時代の鉄器文化とクラフト・スペシャリゼーション
- V 弥生文化の儀礼
- ⑩ 小林青樹 前1千年紀のユーラシアにおける青銅器文化
 - ⑪ 吉田 広 弥生青銅器祭祀の展開と特質
- VI 弥生文化と縄文文化
- ⑫ 小林謙一 縄文時代晩期～弥生時代前期における土器使用状況からみた生業
 - ⑬ 中沢道彦 レプリカ法による長野県氷遺跡出土土器の種実圧痕の研究
- VII 弥生文化と古墳文化
- ⑭ 上野祥史 東アジア世界と弥生時代社会
 - ⑮ 岸本直文 倭における国家形成＝古墳時代開始のプロセス
 - ⑯ 広瀬和雄 東国の初期古墳の2～3の問題
- VIII 弥生文化とは何か
- ⑰ 安藤広道 水田中心史観批判の功罪
 - ⑱ 設楽博己 弥生文化の範囲
- 研究ノート
- ⑲ 藤尾慎一郎・山崎頼人・坂本稔 福岡県小都市大保横枕遺跡の年代学的調査―弥生前期の二重環壕を備えた集落の年代―
 - ⑳ 藤尾慎一郎・濱田竜彦・坂本稔 鳥取平野における水田稲作開始期の年代学的調査―弥生前期中頃の突帯文土器―
- 調査報告
- ㉑ 設楽博己・高瀬克範 関東地方における穀物栽培の開始―レプリカ法による分析を通じて―

V 全期間の研究成果

はじめに

共同研究員は、IIで述べたような分担のもと、弥生長期編年のもとでは、弥生文化に関する従来の考え方がどのような影響を受けるのか、という問題を中心に取り組み、弥生文化像の再構築に挑んだ。研究は内容的に3つに分けることができる。

まず、弥生長期編年の採用は、日中韓の間で暦年代という同じ時間軸をもとにした議論を可能とし、国内にあっては土器型式の存続幅を念頭においた解釈を可能としたことをあげることができる。同じ時間軸をもとにした議論を可能としたという点では自然科学との協業においても同じことがいえる。

次に、古墳の成立に果たした弥生文化の鉄を、どのように位置づけるのかという問題について、生産力発展をもたらしたハードウェアとして捉えるのか、それ以外の役割を与えるのか、という議

論が行われた。

3つめは、弥生文化とは何か、という定義の問題に派生して、水田稲作を行う文化の多様性について議論が行われた。

弥生長期編年の採用

共通の時間軸のもと、韓国の青銅器文化が弥生文化の成立にあたって、どのような影響を与えたのか、という問題に取り組んだ李亨源は、炭素14年代の結果、青銅器文化成立期の土器である突帯文土器の下限年代と、西日本の最古の突帯文土器の年代が併行することを前提とした議論が可能となったという。上野祥史は、青銅鏡の製作年代と甕棺への副葬年代のズレを、伝世で説明しなくてもよくなったことをふまえて、弥生長期編年のもと、漢帝国の外交政策という視点から弥生文化を東アジアの中に位置づけようとしている。それは決して楽浪郡の設置を契機とする朝貢という視点だけでは説明できないものであり、実際の漢式鏡の入り方をもとに、前漢成立直後から弥生社会と関係をもっていたのかどうかを証明できるかどうかにかかっている。李昌熙は、韓国南部における青銅器時代最古の鉄器の年代が、弥生最古の鉄器の年代よりも古いことを根拠に、弥生文化の鉄のルーツを韓国青銅器文化に求めたが、型式学的な特徴から弥生文化の鉄器が中国東北部・燕の鉄器と直接的な関係をたどれるとする、小林青樹や野島永の批判を受けている。小林青樹は、暦年代をもとにユーラシア大陸東半部の前1千年紀における青銅器文化の系譜関係をダイナミックなレンジで説いた。前6世紀における北方草原遊牧民の文化系譜と中原の燕国系譜のものが、遼寧式青銅器文化で受容・変容され、それが韓半島を経由して前4世紀に日本列島に伝播したと位置づけた。

日本列島に伝播した青銅器は、その後の600年あまりで各地各様の展開を見せるが、その有様を詳細に論じたのが吉田広である。二大青銅器である武器型祭器と銅鐸は、本来備える機能性の違いが祭祀形態の違いを規定したが、本来の機能が消失したあとは大型化するという共通点を持ちながらも、金属光沢と文様造形性が統合された銅鏡として、次代の墳墓祭祀における重要なアイテムに継承されていくことを説いた。

こうした青銅器や鉄器など、大陸起源の文物と弥生文化との関係を論ずる際に、炭素14年代にもとづく較正暦年代は、もはや不可欠のものとなったのである。

古墳成立の背景

炭素14年代の影響は暦年代だけではなく、土器型式に存続幅を与えたことによって、これまでの見方が大きく変わることとなった。たとえば、これまでは土器型式の存続期間は同じと仮定してやってきたが、炭素14年代測定の結果、土器型式の存続幅は30年から150年まで不均等幅であることが明らかにされたことで、山田康弘、岸本直文や松木武彦の研究にその影響が早速現れている。

山田は、弥生墳墓の累積効果を前提とした弥生墓制論に挑戦している。

岸本は、弥生後期から古墳成立期までの土器型式に、炭素14年代測定の成果である存続幅を当てはめ、炭素14年代に基づく墳丘墓の年代をもとに新たな枠組みを提示している。卑弥呼の共立以前を弥生後期、共立以降を古墳時代として、西日本における古墳成立のプロセス復原を目指す。

松木は岡山平野の人口問題を取り上げ、中期中葉以前の人口と中期後葉以降の人口を遺跡数から

推定するが、前半の約 700 年の人口があまりにも少ないのに対し、後半の約 500 年は人口が急増することを明らかにした。つまり発展の度合いは時間の長さに比例しないことを示したのである。そもそも弥生長期編年では鉄器の出現が、水田稲作の開始から約 600 年たった前 4 世紀前葉であることから、それまでの 600 年あまりは石器だけの世界であり、水田稲作もなかなか広まらなかったことがすでに明らかにされている。弥生文化後半期の 600 年あまりを取り上げても、鉄器が順調に増加するのは九州の北半部だけで、それも加工具が中心であることが野島によって明らかにされている。可耕地の拡大に大きな影響を与えたとされてきた打鋤、今でいう鉄製農具は、九州北部でも後期後葉にならないと数が増えず、それ以外の地域では依然として工具と鉄鍬が主流を占めることから、これをどう見るかは、古墳成立の前提条件としての生産力の発展に、鉄がどのように関わっていたのかを考える時に、評価の違いとなって現れた。野島や広瀬和雄、松木、岸本は、石器がない以上、鉄器が普及していることは確実なので、鉄器の役割を重視するが、その実態は、木製農具を加工する加工用鉄器の増加であった。鉄器加工具の普及を背景とする木製農具の増産によって、農業生産が向上したと考えることも可能だが、鉄器の増加を生産力の発展という経済現象と結びつけるだけではなく、鉄素材の入手という遠距離交易に果たした首長層の役割が、首長層の政治的基盤の向上に結びついた、という視点での解釈を、そろそろ全面に押し出す時期に来たのではないだろうか。

弥生文化とは何か

水田稲作を行う文化はすべて弥生文化なのか、という藤尾の疑問に端を発した弥生文化とは何か、という定義の問題は、西日本における縄文と弥生、東日本における縄文と弥生、青森における弥生と続縄文の線引き問題を引き起こすこととなった。設楽は、レプリカ法による調査結果を受け、突帯文土器以前の穀物・雑穀栽培は現状では考えられないとした上で、縄文に一般的な生業構造である網羅的な生業構造の中に、稲作が位置づけられれば、それはもう弥生文化とみなすと主張した。この設楽見解は、突帯文土器以前の穀物栽培を肯定的にとられ、縄文の網羅的な生業構造のなかに稲作を位置づけて、縄文文化の稲作を前提とする藤尾や山崎純男、小畑弘己の意見と対立する。西日本では、網羅的な生業構造から選択的な生業構造への転換をもって、縄文と弥生を経済的に線引きする考え方が、1990 年代から一般的になっているので、設楽の考え方とは相容れない。東日本が選択的な生業構造に転換するのは前 3 世紀の弥生中期中葉である。しかし利根川を越えると、選択的な生業構造のなかで水田稲作が行われていた地域ははっきりせず、斎野裕彦のように仙台平野も津軽平野も網羅的な生業構造の中での水田稲作と考える研究者もいる。選択的な生業構造のなかで水田稲作を行わない限り、環壕集落や共同体祭祀は出てこない。藤尾はこれらの文化を弥生文化には含めず、政治社会化を目指さない水田稲作文化と位置づける。

政治社会化を目指さない水田稲作文化であっても、全国 2 位の規模を誇る箸墓型前方後円墳である梵天山古墳が、3 世紀の常陸太田に成立する意味を問うのが広瀬和雄である。水田稲作を行っているのは確実で、人口が多いにもかかわらず政治社会化せず、西日本とほぼ同時に古式の前方後円墳を造り得た、この背景には何かあるのか。政治社会化して古墳を作る西日本、政治社会化せず古墳を造る利根川以東～東北中部。いずれも弥生文化と捉える設楽や高瀬、石川日出志、弥生文化と

は捉えない藤尾。両者ともこの疑問に答える義務を負っているといえよう。

そして津軽には水田稲作を300年もの間、行うものの、洪水によって壊滅後は水田稲作をやめて、古墳を造らない道歩んだ人びとがいた。高瀬克範は、東北北部を北の「ボカシ」の地域とした藤本強の見解に異を唱えて、むしろ異なる文化の担い手たちが雑居していた地域と考えた方が実態に近いと主張する。かつて林謙作は、複数の文化がみられるものの、主体となる文化がない状態をエビ縄紋とよんだが、これは林もいうとおり「文化の段階」を示す用語であって、時代区分の概念ではない。縄文と弥生だけでは説明できない、中部・関東の条痕土器文化や、関東北部～東北中部の水田稲作文化、そして青森の砂沢～田舎館文化をどのように定義するのか、重要な問題である。

稲と鉄、という言葉で表現された従来の弥生文化観は、その当初から鉄器による生産力の発展に支えられ、わずか700年という短い時間で、世界でも珍しい急速な古代化を成し遂げ、古代国家を成立させるという、右肩上がり的高度成長型弥生文化観で説明されてきた。

しかし炭素14年代に基づく弥生長期編年のもとでは、前半の600年は大陸系磨製石器でひたすら木製農具を作るものの、なかなか水田稲作は広がらなかった。その後、まず韓半島との対外交流が前4世紀に本格化して青銅器や鉄器が現れ、次に楽浪郡が設置される以前の前3世紀から中国との対外交流が始まると、社会の変化が速度を上げていくと考えられるようになってきた。韓半島東南部からもたらされる鉄素材を材料に鉄製加工具が作られ、木製農具が増産されるようになる。この動きは古墳前期までほとんど変わらない。古墳は、低成長の弥生前半期と、高成長の弥生後半期に特徴づけられる弥生文化が、鉄器の普及や生産力の発展といったハードウェアを前提に成立する西日本と、本格的な水田稲作が始まってからわずか500年足らずで政治社会化もしない関東北部～東北中部にかけての地域で、それほど時間をおかずに成立する。

こうした時期的な多様性と地域的な多様性をもつ諸文化が、藤本のいう「中の文化」のなかには混在していたのである。この諸文化を、弥生文化の中の多様性と捉えるのか(設楽, 高瀬, 石川日出志), 弥生文化と複数の文化からなる集合体と考えるのか(藤尾), 今後の議論の対象となる。

VI 研究組織

[共同研究員] (◎は研究代表者, ○は研究副代表者。所属は発足時)

- 李 亨源 韓国・韓神大学校博物館
- 安藤 広道 慶應義塾大学文学部
- 小林 謙一 中央大学文学部
- 小林 青樹 國學院大學栃木短期大学文学部
- 設楽 博己 駒澤大学文学部 (22年4月より東京大学大学院)
- 野島 永 広島大学文学部
- 松木 武彦 岡山大学文学部
- 吉田 広 愛媛大学ミュージアム
- 高瀬 克範 明治大学文学部 (23年4月より北海道大学文学部)
- 岸本 直文 大阪市立大学文学部
- 小椋 純一 京都精華大学

-
- 山田 康弘 島根大学法文学部 (23年4月より本館・研究部)
- 上野 祥史 本館・研究部
- 坂本 稔 本館・研究部
- ◎藤尾慎一郎 本館・研究部
- 西本 豊弘 本館・研究部
- 広瀬 和雄 本館・研究部
- 李 昌熙 本館・科研支援推進委員 (23年4月から外来研究員)

[ゲストスピーカー]

- 21年度 今村 峯雄 本館名誉教授,
石川 岳彦 日本・中国考古学会会員 12月26～27日
- 22年度 石川日出志 明治大学文学部 5月17日
山田 康弘 島根大学法文学部 12月25日
- 23年度 中沢 道彦 長野県考古学会会員 5月21～22日

(国立歴史民俗博物館研究部)



青森県砂沢遺跡 2011.7.24



青森県砂沢遺跡 2011.7.24



青森県郷土館 2011.7.24



京畿道駅洞遺跡 2010.10.25



京畿道駅洞遺跡 2010.10.25



京畿道雲陽洞遺跡 2010.10.25



江原道居礼里遺跡 2010.10.26



江原道中島遺跡 2010.10.27